

春2月になると、水戸の「偕楽園の梅まつり」が賑やかに催されます。

この「偕楽園」は、第9代水戸藩主徳川斉昭が藩校として、城内三の丸に創設した「弘道館」とともに造られたものです。

「厳格な学問の場」としての「弘道館」と、「衆と偕(とも)に楽しむ場」としての「偕楽園」を藩内随一の景勝地とすべく開園しました。その背景にあった思想が、表題に掲げた「一弛一弛」であり、「時には厳格に、時には寛容に生きるべき」との『礼記』にある一対の思想であったと言われています。

「弘道館」との校名は、『弘道館記』の冒頭にある「弘道とは何ぞ。人、よ道を弘(ひろ)むるなり。」からつけられたと資料にあります。

「弘道館建学の精神」も「弘道館記」に記され、「神儒一致」「忠孝一致」「文武一致」「学問事業一致」「治教一致」の五項目とされます。

まさに「教育によって人心を安定させ、教育を基盤として国を興す」という建学の精神を象徴する考え方が示され、いわゆる「水戸学」を代表する考えとして広まりました。

水戸藩の教育で中心的な役割を果たしたのが、斉昭の右腕と称された藤田東湖であり、「弘道館記」の草案をまとめ上げた人物です。

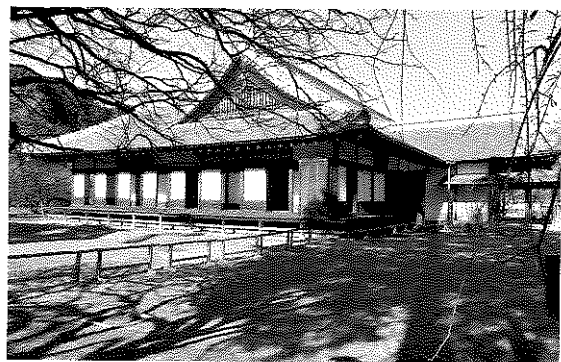
その教育内容・手法は、「水戸学」として広く普及され、吉田松陰や西郷隆盛など、幕末の志士に大きな影響を与え、明治・昭和初期にかけての我が国の人材育成に影響を与えたと言われます。

写真は、「弘道館正庁(重要文化財)」であり、藩主斉昭が正庁第一の間である正席に臨席して学問や武芸の試験を行い、儀式を執り行う施設であったと言われています。

冬の冷たい風を感じながら弘道館周辺を散策してみると、各種の梅が既に芽を膨らませており、江戸時代にタイムスリップした様な錯覚さえ覚え、厳しい人材育成が行われた往時を偲んで、身が引き締まるのを覚えました。

デジタル思考が世に蔓延し、寛容性など口にもできないほどにギスギスした社会になり、今を生きることに疲れ切っている人々が増えています。改めてこの「一弛一弛」と言う考え方を学び、名君徳川斉昭を偲びつつ「弘道館」を訪ね、「偕楽園の梅まつり」を楽しんで頂きたいものです。

茨城偕行会副会長 山根峯治 記



弘道館正庁 (重要文化財)



至善堂 (重要文化財) 建物



至善堂書院

至善堂は、徳川幕府最後の将軍徳川慶喜が大政奉還をした後一時期この部屋で謹慎したと言われています。

書院床の間には、徳川斉昭(烈公)直筆の和歌を記した要石の歌碑の拓本が掛け軸にしています。

「行末毛(いくすえも) 富美奈太賀弊曾(ふみなたがえそ) 蜻島(あつきしま)」

大和乃道存(やまとのみちぞ) 要那里家流(かなめなりける)」

『神道を学び、道徳を行く末まで伝えることが教育の要である』という意味 ※「水戸二周辺史跡ガイド」から抜粋